

正の強化で維持される「イヌのしつけ」についての考察

A study of the "Dog Training" enhanced positive reinforcement.

高山 仁志

Hitoshi Takayama

立命館大学大学院応用人間科学研究科

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

Key words: 正の強化によるイヌのしつけ, 飼い主支援, 行動的 QOL

問題と目的

家庭で飼育されているペットとしてのイヌに対して、「犬のしつけ」またはドッグ「トレーニング」が行われ、そのサービスを提供するプロは、「家庭犬ドッグトレーナー」と呼ばれる。こうした「しつけ」「トレーニング」においては、「イヌに人間社会でのマナーを教える」ということが、その目的であると言えよう。つまり、「イヌがヒトと共同生活を送る中で、何らかの問題を起こしている、あるいは起こす可能性があるため、それを解消する」という目的のもとで、行われるものと考えられる。

飼い主が「イヌを飼う」ことの目的は「イヌと暮らすことで、飼い主にとって好ましい行動の選択肢が増加すること」と、まとめることができるであろう。これは、「行動をした結果、好ましい状態が得られる」という、「正の強化」を目的としたものであると言える。一方、「しつけ」や「トレーニング」は、先述した通り「行動をした結果、好ましくない状態を解消する」という、「負の強化」によって維持されている行動と言える。つまりここに、「飼い主が求めるもの」と、「トレーナーが提供するもの」に、大きな隔たりが存在する。また、このような事態は、本来的には「イヌと飼い主が幸せになること（正の強化）」を目的としながら、「困っている状態のクライアント」を求めるという矛盾をはらむことになる。

本研究は、そうした隔たりを解消しつつ、「しつけ」「トレーニング」の実践内容をイヌと飼い主の「できる」に注目して表現することで、「正の強化で維持される行動」としての、新しい「しつけ」「トレーニング」について考察することを目的とする。

方法

メスのチワワ（実践開始時生後2ヶ月）と、その飼い主からの依頼によって開始したしつけ実践において、「実践前には存在しなかったが、実践によって新たにできるようになった正の強化で維持される行動」を「できる」とし、飼い主自身にイヌと飼い主の「できる」の数を報告してもらい、累積記録で表現した。

結果と考察

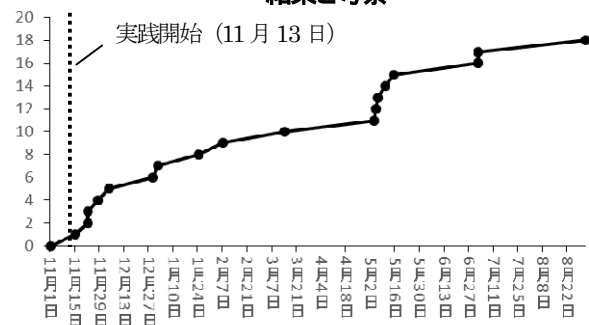


図1 イヌと飼い主の「できる」の数の累積記録

結果として、イヌの「できる」が増大するとともに、飼い主の「できる」も増大していくことが、明らかとなった（図1）。

望月（2001）の「行動的QOL」という指標によれば、「QOL」とは「正の強化で維持できる行動の選択肢」の数で表され、その選択肢が拡大するような作業こそが、援助者に求められるミッションとなる。そして、ドッグトレーナーとは「飼い主を援助」する「対人援助」職といえる（高山，2009）。その援助とは「困りごとの解消」だけに終始するのではなく、イヌと飼い主の「できる」を積み上げることで、「イヌと飼い主の行動の選択肢が拡大していく」ことを目標とした、「正の強化」によって維持される「しつけ、トレーニング」を目指すべきと言えるのではないだろうか。

本研究の「できる」の数は、飼い主の報告をもとにしているため、飼い主自身も気づいていない「できる」が存在する可能性がある。今後は、飼い主とトレーナー双方による記録が必要であろう。また、「飼い主のQOL」だけではなく、「イヌのQOL」により着目した指標による評価も、今後の課題と言えるであろう。

参考文献

- 望月 昭（2001）行動的QOL：「行動的健康」へのプロアクティブな援助 行動医学研究, 6(1), 8~17.
高山 仁志（2010）ドッグトレーナーという職業が持つ機能とは—リーダー論への批判を通して— 対人援助学会第2回大会ポスター抄録。